



パラウク・ワ語の二つの名詞化標識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2018-05-15 キーワード (Ja): パラウク・ワ語, 名詞化, 名詞連続, 分離可能性 キーワード (En): 作成者: 山田, 敦士 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009618

パラウク・ワ語の二つの名詞化標識 *

山田 敦士

Two Nominalizing Markers in Parauk Wa

Atsushi YAMADA

要旨 パラウク・ワ語(オーストロアジア語族、中国雲南省)の*pa*と $c\bar{e}$ という形式は、従来、後続する品詞の違いに対応する有標的な連体修飾標識とみなされてきた。本稿では、これらの名詞構造化(以下、名詞化)にかかわる形式ととらえ直し、それぞれの特徴の記述をおこなう。*pa*について、動詞性従属部の名詞化機能を第一義としてもつ形式であり、名詞化に際しては名詞の意味役割による制限が存在する。名詞化された上で、先行する名詞との間に、名詞連続的な同格関係あるいは修飾関係といった統語関係を結ぶ。両者の違いは、先行詞となる名詞と名詞化される動詞句との項関係の有無である。テキストにおける分布をみると、前者がかなり優勢にみえる。一方、 $c\bar{e}$ は単に強調的意味を示すのではなく、前置される名詞が分離可能物が否かが生起の基本原則である。 $c\bar{e}$ 自体、おそらく動詞 $c\bar{e}$ (求める、保有する)の連体修飾用法から派生してきたと考えられ、このような分離可能に関する性質の反映もその原義に由来すると考えられる。

キーワード : パラウク・ワ語、名詞化、名詞連続、分離可能性

1. はじめに

パラウク・ワ語¹の先行研究において、*pa*と $c\bar{e}$ という形式は、連体修飾成分であることを示す助詞(原文では「结构助词」として扱われてきた。以下に、パラウク・ワ語文法の代表とされる周ほか(1984)の記述の概略を示す。以下では便宜上、グロス²は直訳にて、表記は筆者のものに変換して示すこととする。

¹ パラウク・ワ語はオーストロアジア語族パラウン語派に属する言語である。中国雲南省西南部からミャンマー連邦シャン州東部の一帯を中心に、タイ王国北部にかけて広く分布する。話者は自称パラウクであり、中国では公定民族の一つである佤(ワ)族の威信的な集団である。本稿では以下の音韻表記を用いる。

子音 : *p, ph, b, bh, t, th, d, dh, c, ch, j, jh, k, kh, g, gh, ʔ, m, mh, n, nh, ɲ, ɲh, s, h, v, vh, y, yh, r, rh, l, lh*

母音 : *i, u, u, e, ɛ, o, ɛ, a, ɔ*

超分節素 : 非弛緩(無標) / 弛緩(母音に下線で表示)

パラウク・ワ語は、いわゆる孤立語的な特徴を強く示す言語である。基本語順はVSOであり、主題化等の要因でSVOとなることがある。一般に、主要部が従属部に先行する統語構造を示す。語彙範疇として、名詞と動詞の区別が重要であり(山田2017)、いわゆる形容詞は動詞に含まれる。文法の全体像は山田(2007、2008)を参照されたい。

[*pa* について]

動詞、形容詞あるいは句が連体修飾成分であることを表わす²。

- 1) *?r?* *muih* *tai* *pa* *rauh*
 1sg. 愛する 花 PA 赤い

「私は赤い花が好きだ」

文脈によって被修飾名詞が省略されることもある。

- 2) (*lo?*) *pa* *krai* *mai?* *khə*
 (話) PA 話す 2sg. 正しい

「あなたの言うことは正しい」

[*cɛ* について]

名詞、代名詞あるいは句が所有関係を意味する連体修飾成分であることを表わす。

- 3) *?an* *məh* *krauy* *cɛ* *mai?*
 あれ である もの CE 2sg.

「あれはあなたの物である」

文脈によって被修飾名詞が省略されることもある。

- 4) (*si.be?*) *cɛ* *mai?* *kən* *khrau?*
 (衣服) CE 2sg. まだ 新しい

「あなたの(服)はまだ新しい」

一方、パラウク・ワ語においては、もっぱら語順によって修飾関係を示す方法も存在する。趙ほか(1998)では、周ほか(1984)の上記の記述を支持しつつも、語順のみによる(5)(6)のようなかたちがむしろ一般的であり、(1)(3)は習慣的或いは強調的な用法であると指摘している。

- 5) *?r?* *muih* *tai* *rauh*
 1sg. 愛する 花 赤い

「私は赤い花が好きだ」

- 6) *?an* *məh* *krauy* *mai?*
 あれ である もの 2sg.

「あれはあなたの物である」

ここで、この三つの用法(*pa*と*cɛ*による表示があるもの、主名詞がないもの、語順のみによるもの)をそれぞれ「有標型」(例1、3)、「名詞化用法」(例2、4)、「無標型」(例5、6)と呼ぶことにする。先行記述に総じてみられるのは、無標型が一般的、有標型が強調的・習慣的に用いられる用法であり、名詞化用法は有標型からの省略によって派生されたものであ

² 連体修飾構造では常に主要部が前置される。

ka? tiy (魚、大きい)「大きな魚」

ka? liak ?r? (魚、買う、1sg.)「私が買った魚」

laih liak ?r? ka? kah (市場、買う、1sg.、魚、～で)「私が魚を買った市場」

るという見解である。

本稿では、筆者自身の収集したデータを基に、先行記述のこうした解釈の再検討をおこなう。具体的には、*pa*と*ce*が単に強調的修飾関係を表わす標識ではないこと、それぞれ独自の機能、成立過程をもつことなどを指摘する。また、*pa*や*ce*の形成する名詞句（または節）とその他の名詞の連続構造について、無標型との関係も併せて考察する。

2. *pa*の再検討

筆者自身の調査によると、上記(1)の文が成立するには、例えば、次のような文脈が必要である。

- 7) *?r?* *muih* *tai* *pa* *rauh* (*pa* *luj* *?aj* *?r?* *muih*)
1sg. 愛する 花 PA 赤い (PA 黒い NEG 1sg. 好き)

「私は赤い花が好きだ（黒いのは好きではないが）」

(7)では、*pa* *luj*(PA + 黒い:「黒いもの」)が対比的に含意されることで文が成立している。これは*pa* *rauh*(PA + 赤い)が名詞句(「黒いもの」)に相当する資格、つまり名詞句(「赤いもの」)であることを示唆する。

次の(8)から(10)は、花の属性となる色が複数ある場合である。*pa*に関わる要素が並列的である場合、*pa*によってそれぞれが名詞化される(8)のような統語構造で示される。

- 8) *?r?* *muih* *tai* *pa* *rauh* *mai* *pa* *paij*
1sg. 愛する 花 PA 赤い と PA 白い

「私は花(のうち特に)赤いものと白いものが好きだ」

- 9) **?r?* *muih* *tai* *pa* *rauh* *mai* *paij*
1sg. 愛する 花 PA 赤い と 白い

(「私は花(のうち特に)赤いものと白いものが好きだ」)

- 10) **?r?* *muih* *tai* *rauh* *mai* *paij*
1sg. 愛する 花 赤い と 白い

(「私は花(のうち特に)赤いものと白いものが好きだ」)

(8)から(10)の対比から、ここでも「赤い花」のような修飾関係にあるひとまとまりというより、*pa*を含む句が「花」から独立して存在していると考えたほうがよさそうである。このことは、指示詞を加えることによっても確認できる。

- 11) *?r?* *muih* *tai* *?an* *pa* *rauh*
1sg. 愛する 花 あれ PA 赤い

「私はあの花、つまり赤いのが好きだ」

パラウク・ワ語では、指示代名詞の後に数量詞句および前置詞句を除く修飾成分が続くことはないため、ここでも*pa*以下が同格的に後置されていると考えられる。

以上の言語事実をみると、*pa*は先行研究の指摘するような単なる修飾標識として存在するのではなく、それ自身が名詞単位を構成するという名詞化機能を第一義として持っているように思われる。では、*pa*はどのような単位に前置されるのだろうか。

2.1. *pa*による名詞単位の形成

次の(12)から(17)が示すように、*pa*は動詞(形容詞を含む)単独、あるいは動詞句に前置され、語や句を名詞化するものと考えられる。

- 12) *pa rauh*
PA 赤い
「赤いもの」
- 13) *pa ?ih*
PA 食べる
「食べるもの、食べる人」
- 14) *pa muih ?r?*
PA 愛する 1sg.
「私の好きなもの」 / 「私の好きな人」 / 「私を好きな人」
- 15) *pa ?ot dau? jε?*
PA いる 中 家
「家の中にいる人」 / 「家の中にいるもの」
- 16) *pa ?ih kah tai?*
PA 食べる ~で 手
「手で食べるもの」 / 「手で食べる人」
- 17) *pa ?ih pui kah tai?*
PA 食べる 人間 ~で 手
「人が手で食べるもの」

動詞の結合価の観点から、名詞化される語句に含まれる動詞が1項動詞の場合(例12、15)はその唯一項を、2項動詞の場合(例13、14、16、17)は表示されない項をそれぞれ指示すると考えられる³。そのため、(18)のように、項がすべて表示されたもの(すなわちVSOの節構造)を名詞化することはできない。

- 18) **pa coih ?r? lik*
PA 売る 1sg. 豚
('私が豚を売ること')

一方で、(19)から(21)のように、主語や目的語以外の斜格補語についても名詞化が可能である。

- 19) *naiy ?an mɔh pa yum pau?grom ?r? kah*
戦い あれ である PA 死ぬ 友人 1sg. ~で
「あの戦いは(それで)私の友人が死んだものである」

³ 但し、2項動詞単独で名詞化される場合、特定の文脈的な支持がないという状況下においては、目的語項指示の解釈が優先されるようである。なおパラウク・ワ語では、授受動詞なども2項動詞に分類される(間接目的語は前置詞を伴う)。

20) *khau?* *ʔin* *məh* *pa* *mhan* *ʔr?* *kah*
木 これ である PA 得をする 1sg. ~で
「この棒は私が(それで)得をするものである」

21) *pui* *ʔan* *məh* *pa* *səm* *ʔr?* *mai* *kə?*
人 あれ である PA 食事する 1sg. ~と 昨日
「あの人は昨日私が食事を共にした人である」

(19)から(21)では、前置詞*kah*や*mai*を含むかたちで名詞化がおこなわれる。しかし、(22)に示すように、同じ前置詞に導かれる名詞であっても、場所を表わすものである場合は名詞化ができないようである。また、(23)や(24)に示すように、時間名詞や所有者なども名詞化が不可能である。

22) **tan* *məh* *pa* *ʔit* *mai?* *kah*
そこ である PA 寝る 2sg. ~で
('そこはあなたが寝る場所である')

23) **kə?* *məh* *pa* *hu* *liak*
昨日 である PA 行く 買う
('昨日は買い物に行った日である')

24) **pa* *mhəm* *haukkaiy* (<*mhəm* *haukkaiy* *nəh* '彼/彼女の毛髪はきれいだ')
PA よい 毛髪 よい 毛髪 3sg.
('髪のがいの人')

以上の事実から、名詞化に際しての名詞の意味役割について、次表のようにまとめることができる⁴。

表 1. 意味役割と*pa*名詞化の可能性

意味役割	(主語)	(目的語)	(非直接目的語)				時間	所有者
	動作者、経験者	対象	道具	原因	共同者	場所		
名詞化の可否	○	○	○	○	○	×	×	×

(○は可能、×は不可能であることを示す)

2.2. *pa*名詞を含む名詞連続

*pa*によって名詞化されたもの(以下、*pa*名詞)はほかの名詞に後続し、名詞連続を構成することがある。*pa*自体が名詞単位を構成することを考えると、前接する名詞と名詞化される動詞成分との関係から、名詞連続を同格的なものと同格的なものとの二つのタイプに分類することができる。

タイプ : 同格的名詞連続

25) *lik* *pa* *liak* *ʔr?* *kə?* *ʔay* *mhəm*
豚 PA 買う 1sg. 昨日 (否定) よい
「私が昨日買った(ものである)豚はよくない」

⁴ これはコムリー(1989:167-)で指摘された関係節形成への接近可能性の階層に沿った結果となっている。但し、パラウク・ワ語においては、非直接目的語内に境界が存在する。

このタイプでは、前接する名詞と名詞化される動詞がいわゆる「内の関係」にある。ここでは *pa* 名詞が前接名詞に対し、同格的に接続すると解釈される。

タイプ : 修飾的名詞連続

26) *kaij pa yhe pa keh mɔh kaij yuh bun*
 仕事 PA 妊娠する PA 産む である 仕事 する 娘
 「妊娠出産する人の仕事は若い女性のする仕事である」

このタイプでは、前接する名詞と名詞化される動詞がいわゆる「外の関係」にある。この場合、*pa* 名詞の表わす意味と前接名詞の指示対象は同一でない(仕事≠妊娠する人)ため、同格ではなく修飾関係にあると解釈される。

2.3. テキストにおける *pa* の分布

ここで、テキストにおける *pa* の分布を確認してみよう。筆者自身が収集・整理した口承文芸テキスト *Parauk Wa Folktales* (Yamada 2007) において、*pa* 名詞は 39 例が確認された。先行詞の有無、および項関係による分類を示す。

表 2. *pa* の統語的環境

先行詞	内の関係	外の関係	合計
あり	19	3	22
なし	17	0	17

表 2 に示すとおり、確認された 39 例中 36 例が「内の関係」を示す例であった。「外の関係」は 3 例であった。次に、先行詞がある場合の先行詞の意味的属性について示す。

表 3. 先行詞の意味的属性

一般名詞	抽象名詞	人名	代名詞	合計
17	3	1	1	22

表 3 に示すとおり、22 例中 17 例が一般名詞、あるいは若干の従属要素を含む特定性の高い名詞句であった。抽象名詞として *cuu* 「種類」など 3 例が確認されたが、これらはいずれも「外の関係」の例である⁵。一方で、先行詞が人名および疑問代名詞 (*mɔ?* 「誰」) である事例が 1 例ずつ確認されている。一般に、人名や疑問代名詞は特定性を高めるための操作を必要としないものと考えられる。こうした用例の存在は、*pa* が単純な修飾構造標識でないことの証左ともいえる。次に、先行詞がない場合の *pa* 名詞の文法機能について、表 4 に示す。

表 4. 先行詞がない場合の *pa* 名詞の文法機能

主語	目的語	斜格補語	合計
3	13	1	17

表 4 に示すとおり、17 例中 13 例が目的語として用いられている例であった。このうち、他動詞文における対象が 3 例、残りの 10 例はいずれもコピュラ文における属性を示すものであった⁶。

⁵ 修飾関係の事例の少なさについては、解釈の負担が大きい等の制約が関与する可能性もある。さらなる検証が必要である。

⁶ パラウク・ワ語では他動詞とコピュラ動詞が形式上区別されないため、その非主語項をともに目的語と

2.4. *pa*についてのまとめ

本節では、これまで連体修飾標識とされてきた*pa*について考察をおこなってきた。その結果は以下のとおりである。

- 27) *pa*の機能は第一義的に名詞化である
- 28) *pa*による名詞化の原則は、その欠席項を指示することである。つまり、*pa*-VSOなどは不可能である
- 29) 名詞化できるものには名詞の意味役割による表1のような階層が存在する

表1. 意味役割と*pa*名詞化の可能性

意味役割	(主語)	(目的語)	(非直接目的語)				時間	所有者
	動作者、経験者	対象	道具	原因	共同者	場所		
名詞化の可否	○	○	○	○	○	×	×	×

(○は可能、×は不可能であることを示す)

- 30) *pa*に前置する名詞は、名詞化される動詞の項関係により2タイプに分けられる。「内の関係」にある場合、同格的意味関係が成り立つ文脈が必要である。「外の関係」にある場合、*pa*名詞は名詞連続的な修飾成分となる。後者の事例は前者に比べ、圧倒的に少数である
- 31) *pa*名詞とその他の名詞との名詞連続(有標型)、*pa*の介在しない形式(無標型)との関係は表5のとおりである

表5. *pa*名詞と名詞連続の関係

統語構造の型	形式	特徴
無標型 (<i>pa</i> 介在なし)	[外項名詞-V(S)(O)]	修飾関係
	[内項名詞-V(S/O)]	
有標型 (<i>pa</i> 介在あり)	[内項名詞][<i>pa</i> -V(S/O)]	同格関係
	[外項名詞- [<i>pa</i> -V(S/O)]]	修飾関係

3. *ce*の再検討

ce B(所有者)という形式は、先行記述でも指摘されてきたとおり、そのまま照応的な名詞相当形式として機能する。

- 32) *krak an mɔh ce ʔai*
水牛 あれ である CE (人名)
「あの水牛はアイのである」
- 33) *vaiḱ an mɔh ce ʔai*
刀 あれ である CE (人名)
「あの刀はアイのである」

して扱うこととする。*pa*名詞が指定・措定の文脈で使用されやすいことは、形式的な名詞の生起環境という文脈でとらえることができる。通言語的な課題として、検討の余地が大いにあると思われる。

しかし、あらゆる状況で *cε* B(所有者) という形式による照応が可能なわけではない。

- 34) **kaiy an mɔh cε Krak suat ki?*
 頭 あれ である CE 水牛 殺す 3pl.
 (「あの頭は彼らが殺した水牛のものである」)

- 35) **kuiy an mɔh cε ʔai*
 父親 あれ である CE (人名)
 (「あの父親はアイのものである」)

3.1. 分離可能性の反映

(32)(33) と (34)(35) との対比において示唆されるのは、先行する名詞が分離可能か否かという違いである。表 6 は、A(所有物) *an mɔh cε* B(所有者) というフレームにおいて、角田 (1991:119-121) を参考に、A と B を様々な種類の名詞に変えて検証したものである。

表 6. A(所有物) *an mɔh cε* B(所有者) フレームにおこる名詞

B \ A	A	身体部位	属性	親族	動・植物	その他
人間	<i>ʔai</i> <人名> <i>yi?</i> (代名詞)	<i>ɣai</i> (顔、眼) <i>ne?</i> (身体の肉) <i>haukkaiy</i> (髪)	<i>chu</i> (姓) <i>lo?</i> (話、 意見) <i>sau?</i> (病気)	<i>kuiy</i> (父親) <i>moi?</i> (妻) <i>kɔn</i> (子供)	<i>krak</i> (水牛) <i>preh</i> (野豚) <i>gau?</i> (米)	<i>vaik</i> (刀) <i>ne?</i> (得た肉) <i>ne?</i> (家) <i>kaiy</i> (仕事)
動物	<i>ʔia</i> (鶏) <i>lik</i> (豚)	<i>tɔm</i> (卵) <i>cauy</i> (脚)	<i>lo?</i> (鳴声) <i>jum</i> (価格)	<i>mε?</i> (母) <i>kɔn</i> (子供)		<i>kɔk</i> (小屋) <i>grɔ</i> (籠) <i>sɔm</i> (餌)
植物	<i>binum</i> (南瓜)	<i>pli?</i> (果実)	<i>jum</i> (価格)	<i>si.mε</i> (種)		
無生物	<i>yauy</i> (村) <i>ma</i> (焼畑)	<i>si.vε?</i> (門)	<i>kau?</i> (名前)		<i>khau?</i> (木)	<i>si.mau?</i> (石)

(□は生起が可能であることを示す)

表 6 より、*cε* B による照応が可能なのは、B が人間かつ A が分離可能物の場合という条件がみてとれる⁷。

3.2. 派生過程について

上記の分離可能性に関する性質は *cε* の派生過程と関係があると思われる。実は、*cε* には同音形式で「保有する、求める」という意味の動詞 (意志動詞) が存在する⁸。

- 36) *ʔx? cε si.be? khrau?, mai? cε pa prim*
 1sg. 保有する衣服 新しい 2sg. 保有する PA 古い
 「私は新しい服をとるから、お前は古いの取れよ」

(36) は *kɔi* 「ある、もっている」を用いた次の (37) に比べて主張的な表現であることを考

⁷ A に *lo?* (意見) や *kɔn* (子供) の事例が認められたが、いずれも所有・所属を強調する特別な文脈が想起されるとのことであった。

⁸ 黄ほか (1994:26) も動詞 *cε* との関係に言及しているものの、なぜ「強調的・習慣的」なのかという議論はおこなわれていない。

えると、帰属先を主張するところに意味の中心があると思われる。

37) *ʔrʔ kɔi si.beʔ khrauʔ, maiʔ kɔi pa prim*
1sg. ある 衣服 新しい 2sg. ある PA 古い

「私は新しい服があり、お前は古いのがある」

帰属先を主張するという意味から考えて、動詞 *ce* が分離不可能物に対して用いられるような状況は考えにくい。実際、B(所有者) *ce* A(所有物) というフレームでは、「B が人間」かつ「A が分離可能物」という組み合わせしか許されない。

ところで、先行記述で挙げられている A(所有物) *ce* B(所有者) という用法については、この動詞 *ce* を含む句・節が連体修飾をおこなうと考えて差し支えないように思われる⁹。

38) *lai ce ʔrʔ kɔʔ (<ce ʔrʔ lai kɔʔ 「私は昨日、本を求めた」)*
本 保有する 1sg. 昨日 保有する 1sg. 本 昨日

「私が昨日求めた本」

これは他の動詞(句)が連体修飾をおこなう場合に平行する構造である。しかし、次例のように A(所有物)が本来的に所持できないものである場合もあるため、用法が拡張されてきている可能性も否定できない。

39) *loʔ ce ʔrʔ (<*ce ʔrʔ loʔ 「私は意見を求める」)*
意見 CE 1sg. 保有する 1sg. 意見

「私の意見」

3.3. *ce*についてまとめ

本節では、これまで連体修飾標識とされてきた *ce* について考察をおこなってきた。その結果は以下のとおりである。

- 40) *ce* は分離可能物の所有を主張(強調)する機能をもっている
- 41) A(所有物) *ce* B(所有者) は動詞 *ce* の用法と思われるが、一部拡張的現象がみられる。
ce B(所有者) はこの動詞用法からの派生と推定される
- 42) *ce* 名詞とその他の名詞との統語構造(有標型)、*ce* の介在しない統語構造(無標型)との関係は表7のとおりである

表7. *ce* 名詞と名詞連続との関係

統語構造の型	形式	特徴
無標型 (<i>ce</i> 介在なし)	A(所有物)-B(所有者)	A が分離不可能物
有標型 (<i>ce</i> 介在あり)	A(所有物)- <i>ce</i> -B(所有者)	A が分離可能物 所有・所属 の強調

⁹ この A(所有物) *ce* B(所有者) というフレームにおいても、上記の分離可能性が反映されている。

neʔ ce ʔai / neʔ ʔai
肉 保有する <人名> / 肉 <人名>
「アイの(求めた)肉」 / 「アイの(身体の)肉」

「持つ」という動詞(あるいはそれに由来する付属形式)が所有構造の中で用いられ、主名詞の分離可能性を示すという現象は他言語(例えばアイヌ語など)でもみられるようである(津曲 1992:273-275)。

4. まとめ

以上、先行記述において、単に後続する品詞の違いに対応した修飾標識として扱われてきた *pa* と *ce* について、それぞれが異なる機能・成立過程をもつことを示した。*pa* は修飾標識ではなく、名詞化機能を第一義とみなすべきであること、名詞化に際して名詞の意味役割による制約が存在すること、名詞化された上で先行する名詞と名詞連続的に同格関係（名詞化された動詞と「内の関係」の場合）あるいは修飾関係（名詞化された動詞と「外の関係」の場合）をもつことなどを指摘した。*ce* は単なる強調を示すものではなく、前置される（先行する）名詞が分離可能物であることが使用の条件となる。この *ce* 自体、おそらく動詞 *ce* の連体修飾用法から派生されたものであるため、分離可能性という性質の反映も動詞 *ce* のもつ意味に由来すると推測される。

なお、この両形式は単独で用いられることはないものの、名詞句構造の主要部の位置に立つという点から、名詞の一部（形式名詞）と認めることができる（山田 2008:77-78）。また、照応的という観点からは代名詞に近い機能をもつといえるだろう。

謝辞

* 本稿は日本言語学会第 133 回大会での報告（「パラウク語の名詞化にかかわる 2 つの形式」）をもとに、新規データによる確認および加筆修正をおこなったものである。本稿で用いるデータは、筆者自身の調査によって収集されたものである。調査に協力してくれた協力者の方々に謝意を示したい。なおデータの補充および再度の分析に際し、次の JSPS 科研費の助成を受けた。

・基盤研究(B)「言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明」(代表者:新谷忠彦、課題番号 15H05154)

・若手研究(B)「ワ族の文字表記と書承文化に関する調査研究」(代表者:山田敦士、課題番号 16K16828)

参考文献

- バーナード・コムリー (1989) 『言語普遍性と言語類型論』松本克己・山本秀樹訳 ひつじ書房
- 黄同元・王敬骝 [Huang, Tongyuan・Wang, Jingliu] (1994) 「佹语概述」, 王敬骝・张化鹏・肖玉芬編 『佹语研究』, 云南民族出版社、1-38
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版
- 津曲敏郎 (1992) 「所有構造と譲渡可能性: ツングース語と近隣の言語」宮岡伯人編 『北の言語: 類型と歴史』, 三省堂、261-278
- Yamada, Atsushi (2007) *Parauk Wa Folktales* ILCAA
- 山田敦士 (2007) 「パラウク・ワ語」『文法を描く: フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』2、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、259-284
- (2008) 『パラウク・ワ語記述文法』, 北海道大学博士論文
- (2017) 「パラウク・ワ語における語類」『北海道言語文化研究』15、39-48
- 赵岩社・赵福和 [Zhao, Yanshe・Zhao, Fuhe] (1998) 『佹语语法』, 云南民族出版社
- 周植志・颜其香 [Zhou, Zhizhi・Yan, Qixiang] (1984) 『佹语简志』, 民族出版社

執筆者紹介

氏名：山田敦士

所属：日本医療大学保健医療学部

E-mail：a_yamada@nihoniryō-c.ac.jp / a.yamad@gmail.com